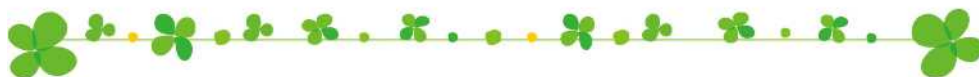


「愛に生きる」を読んで



「愛に生きる」を読んで感じたことを班別に取りまとめました。他の先生が感じたことなどをみんなで共有し、スズキ・スピリッツを深めていきたいと思います。

第1班 まえがき・はじめに・第1章

P4 いかに生きるか、育てられなかった能力は自分でつくらなければならない。悲運に目げないで、よい人生に転換しなければならない。あきらめてしまっはいけないし、あきらめることもない。ひとそれぞれに可能なのです。

この部分が、自分の中で特に心に響きました。内容を読み解く前から、読んでみたいという気持ちをもたせてくれるだけでなく、読み始める前から、自分自身の思考を前向きにしてくれると感じました。子どもだけでなく、私たち大人自身も苦手だからできない。ではなく、毎日の反復活動により、出来なかった事を可能にしたり、また経験を積み重ねる事で、思考も磨かれより豊かな表現や行動ができるようになると、改めて同感と共に希望をもらった気がしたからです。

P4 好ましくないひとに育ったのは、好ましくない育て方をしたのだ、できないひとになったのは、できないひとに育てられたのだ

親の立場としては耳が痛い言葉だったが、共感できる文章だった。園の子ども達を見てもやはり家庭環境によって言葉遣いや仕草、行動が違ってくる。例えば笑顔の多い家庭では家族みんなが笑顔であったり、「ありがとう」と感謝の気持ちを言葉で伝える家庭では、自然と「ありがとう」が言える子どもに育つなど、そう思えることが多々ある。親の姿を見て子どもは育つ。育てられた家庭によっても、マナーや習慣それぞれであり、教えてもらってないことはできない。生まれもった才能ではなく環境によって育てられている。育てる環境が大事と改めて感じた。私たち保育者も人的環境として子ども達に正しい姿を見せていかないといけないと思った。

P5 一本の木は生き生きと芽をふき、その枝の各部分に美しく花が咲く。そして人間は、この大自然の営みのまま、その生命を生きる

その後に続く、それはすべてを愛し、真と善と美を求めてやまぬものなのです。の文章から、鈴木先生の想いが伝わってきて、③の強く共感しました。鈴木先生のお人柄や子どもたちへの眼差しなどすべての想いが詰まっているように思いました。

P16 セキセイインコにピーコと名前を覚えさせる

P17 まいた種が、土の中で私たちの目には見えないけれども、水分と温度と明暗の刺激を受けて、毎日少しずつ変化して、ある日ついに芽を出す。あれと同じことなのでしょう。

生まれた時からのくり返しが、成長過程で刺激を与え、親との関わりや環境によって能力が身について育つ。くり返し練習する。これは楽器練習、九九の練習、漢字練習にも繋がる。「くり返し、くり返せ」

毎日の積み重ねで出来るように、自信を持てるようになることです。

P17 もうだめだとあきらめてしまうとせっかく育ち始めていた能力も、外に現れずにしぼんでしまう。そこを忍耐強くくりかえす

保育現場でも日常的に見られるが、保護者や保育者といった周囲の大人が良い見本となることで、模倣し子どもが育っていく。そしてそれが、子どもの人格形成に直接影響するため、強い責任感をもって日々の言葉遣いや態度を見直していかなければならないと改めて実感した。そして、周りの大人が工夫した環境を整えつつ根気強く関わることで子どもの種がある日、芽を出し成長していくのだと今回の研修で学んだ。記録をする上である程度子どものライン・ボーダーを決めてしまい諦めてしまいがちになるが、可能性を信じて忍耐強く子どもに関わっていければと思う。

P17 能力が身につく手続きには時間がかかる

P18 身についた能力が働いてさらにスピードを加え、新しい高い能力へと発展する

P20 無意識のうちに、見聞きするすべてを身につけて育ち、その人格を形成していく

P20 ことばだけでなく、また音楽だけのことでもありません

P31 すぐれた素質を持って生まれているということの意味は、環境に順応する感動・速度が優れているということ

P32 すべて生きようとする生命の力が環境に適応して育っていった姿なのである

子どもたちが能力の法則にしたがって成長している。外からは見えない部分であるからこそ、今まで自分たちがやってきたことは間違えではない！と背中を押していただけたように感じるから。また、今自分たちがどう子どもたちに関わったらいいいのかがよく分かった。

P24 世界中の子どもを音痴にも

幼児期の子どもたちの保育をしているなかで、歌の事だけでなく私達の言葉の使い方や響きを全て吸収しているということを改めて考えさせられました。環境によってその子の将来にも影響するため、今の時期にしかできない感動の実体験をし、一緒に共感するなかで心を育てていきたいと思いました。

P24 「世界中の子どもを音痴にも」

P32 「環境にないものは育たない」

自分が担任をしている子どもたちの口調や特徴を観察していると、ご両親の話し方やイントネーションにそっくりであったり、時には私たち担任の口癖や立ち振る舞いが子どもたちに移っていることもあったりするので、「環境にないものは育たない」ということをとても強く感じます。

P33 育てられた姿を見て、それを生まれつきだとする考え方をやめなければならない。

生まれつきの優劣はまだわからないということを知り、りっぱに育てていこう

子どもたちの特性や気質はそれぞれ違うものを持っているだろう。だけど自分の子育てを振り返ってみても、保護者と園の子どもたちの関わりをみても親の影響の大きさは計り知れないと感じる。

例えば転んでケガをした子どもに、親が肯定的な受け止めや言葉かけをすると子どもの心は安定するし、友だちがケガをした時に同じように声をかけられると思う。しかし親が否定的な対応をしたら転んだ痛みも、転んだことに対しても肯定的な受け止めをされた子どもと変わってくると思う。

子どもは育った環境で自分が受けたように他者にするのだと思うので、ひとりひとりの子どもの背景まで考えた上で接することが大事だと感じた。

P34 すこしでもりっぱに、より美しい心のひとに、そして幸福な道へ

保育者として、親として、思うことはこの言葉でいつでも子どもの幸せを願っています。必ずしも、りっぱになる必要はないし、ただただ健康に美しい心で幸せに育ってくれたらいいなと思うばかりです。そして、自分の道をひらいていけるといいなと思っています。

P38 才能は生まれつきではなく、どの子ども、経験と努力とを重ねただけ育つ

保育活動でしゃぼん玉あそびをした際に、子どもたちは保育者からの話を見聞きし、その動きを実践する。最初はしゃぼん玉が上手く作れなかったり、2〜3個しか飛ばせなかった子が、くり返ししゃぼん玉の液を道具に付けて吹くを根気強くする。活動が進むにつれどんどん上手くなり、しゃぼん玉の個数も増えました。「せんせーい、みてー！」と笑顔いっぱい自信に満ち溢れた姿が見られました。才能は生まれつきではない「経験と努力とを重ねる」に同感した活動でした。

P39 降参したら不可能のままで終わったはずの能力が生まれた。目に見えないわずかなつのが能力が新しい能力を助け育てて、ついに一つの大きな能力になったのです

幼稚園でとびばこの練習を先生方がそばについていて、励まししながら何回も何回もしていてとべるようになったこと。

P40 能力は生命である

小児まひの少女の事例からコツコツと頑張る忍耐強い努力をすることで能力は生命力を強くしているのだと鈴木先生のこの考え方になるほどと、考えることができました。

P40〜41 どのような能力も、実行を怠る者には備わることはありません。

能力がないと決めつけずに、様々なことを行うことで、自ら能力をつけれるようになると感じた。

P56 「耕ちゃんは、三年のあいだに、自分でも知らないで、無作法や、やりっぱなしを身につけてしまった。 ～ 家じゅうが黙って、もっと良い作法、良い行動をしようではないか。（中略）わたしはそう思うのでね。」

より良い行動を身につけさせるために、言葉で伝えるのではなく、他のみんなが正しい行動やより良い言葉を使うことで、自然と良い方向へ導いていくことができるという部分に強く共感しました。言葉で伝える際に、どのように伝えればよいか工夫してもうまく伝わらなかったり、つい感情が入ってしまったりということがあり言葉選びの難しさを感じていたので、園生活でも私生活でも自分がよい行動をとることで相手もよい方向へ導くということを心がけていきたいと感じました。

P4 好ましくないひとに育ったのは、好ましくない育てられ方をしたのだ

P20 無意識のうちに、見聞きするすべてを身につけて育ち、その人格を形成していく

P30 生まれたばかりのときから二、三年間の、きわめて早い時期、きわめて短期間のうちに、子どもは環境のすべてを学びとり、その条件に適応した能力の中核をつくりあげる

P34 「(略)すこしでもりっぱに、より美しい心のひとに、そして幸福な道へ——子どもを育てる親としての心配はそれだけでじゅうぶんでしょう。人間としてりっぱに育てば、りっぱな道がひらかれ、(中略)私たちは心をますますりっぱにするように努力しましょう。」

親として、保育者として耳が痛いところでした。同じ年齢の子どもたちでも、それぞれの家庭での育ち方によって、態度や言葉遣いが違ってきたり、園生活においても、私たち保育者の行動や言葉を真似る姿に、「人的環境」としての私たちの言動が与える影響力に、耳の痛さとともに、身が引き締まる思いがありました。自分の言動をしっかりと振り返り、保育にあたっていきたいと思います。

そして、何ができる何ができなくても心が美しければ、いろんな環境、特に人的環境により、助けてもらえたり支えてもらえたり、道は開けていけるんだと思うと、素敵だな言葉だと思いました。どうしたら心美しくなれるか…と考えた時に、まずは毎日の忙しさにイライラすることなく、余裕をもって、心穏やかに人と接することができたらいいなと思いました。

第2班 第2章

P47 天才という ～ 尊称である

音楽でも何でも小さい時からの努力をおしまず続ける事に共感しました。

P47 天才という生まれつきの才能はない

どんな人でも努力をしてこそその結果や姿であると思ったから。

P47 十六分の一のヴァイオリンを手にした三歳の耕児君が、おとうさんのギター伴奏でひいたのは、ドヴォルジャックの『ユーモレスク』でした

P47 「天才という生まれつきの才能はない。天才とは、そのように育てられた人間に対する尊称である

好ましくない動作が目につき出した時にみんなでただ小言を言う事は耕ちゃんの人生を悪いほうへ曲げてしまう。と皆んなで環境をよくしようと小言を言わずに互いに自分自信も良い行動を心がけ、環境を良くしたところに凄く共感いたしました。

P52 きょうの日のことを最高に生きる

同感しました

P52 なにごとであれ、与えられた仕事、当面する仕事に集中して、全力を打ちこむことの喜びを知っていました。

鈴木先生の言葉で優れた人に接することが、自分の心・感覚・行為を高めていく。それが人格形成の根本条件だとあります。ヴァイオリンでいうと自分の中の感動を訴える演奏が聴いている人の心に届くと思います。ただ、それには自分の中で感動する心をもっていないとできません。たくさんの音楽にふれ、

たくさんの美しいものにふれ、たくさんたくさん美味しいものを食べ、そのような経験を積み重ねていくうちに自分の心が育ち、豊かになっていくと感じます。そこには年齢は関係ないと私は考えます。鈴木先生が音楽学校の講師やコンクールの審査員を断って木曾福島の工場へ行ったこと、正直本意ではなかったのではないかと思います。ただ、与えられた仕事、当面する仕事に集中して、全力を打ちこむことの喜びを知っていた(木曾福島の工場での仕事も一つの経験として)からこそ決断できたと思います。好きなことや興味のあることなら尚良いが、そうでなくとも目の前のことに取り組んでみる、とにかくやってみようという意欲をもつことが、自分を磨き、心を豊かにすることへつながるとひもときました。人生の中で楽しいこと、おもしろいことだけではなく、嫌なこと、苦手なこともあります。そのときにも鈴木先生の言葉を思い出し、自分の心を豊かにしていると鼓舞して、そこから得る学びを大切にしたいです。

そのことから、私は子どもたちにもたくさんのことを経験してほしい、多くのもの(こと)にふれてほしいと考えています。人格形成の大事なこの時期に、たくさんの経験ができるよう教育・保育に努めていきたいと思います。その環境(人的)である私たちも心を豊かにする経験を積み重ねていきたいです。

P56 一家をあげてこうちゃんのために

小言を言うのではなく、よい作法、よい行動の生活をするうにしようではないか。そうゆう環境が大切である。幼稚園でも、正しい環境が大切であるところが同じだと思った。また、小言言わないのはすごいなと思った

P56 耕ちゃんは、(中略)わたしはそう思うのでね

家族で協力して小言を言わずに耕ちゃんをよい子に育てたのには、共感しました。

P56 耕児くんが3年の生活で好ましくない感覚、動作が身についていたが、それに対して小言を言わずに家中でもっと良い作法や良い行動の生活をする事で耕児くんを良い子に育てよう

自分が挨拶をすることで、促したりすることなく一緒にいた子どもたちも気持ちよく挨拶ができたことがこのエピソードにつながった。子どもたちが環境に影響されやすいことはよくあることだと思うが、私たちも環境の一部であり、子どもたちにとっていい環境であることができるように気をつけていきたいと思った。

P56 耕児くんのために、家族みんなでよい作法、よい行動の環境を作ったというエピソード

P60 「わたしは、すぐれたひとに接することが～」という言葉

P71 すぐれたひと、という定義について

保育者は、保育の中で子どもたちのためにどのような環境を用意すべきかを考えている。しかし、一番の環境は、我々保育者なのではないかと改めて感じた。

P60 にもあるように、人格形成の基礎を培う幼児期において、保育者が“すぐれたひと”として存在するということは非常に重要である。私たちがすぐれたひとーあたたかい心、高貴な魂、人間らしい素朴さを持った自然なひとーであるために、日々心がけるとともに、P52にあるように、まずは私達が1日1日を全力で打ち込み、最高に生きる、という姿を見せていくということが大切なのではと改めて感じた。

P63 えらい目にあったといいながらも、不安など感じない、いかにも楽しそうでした

普段の活動やエリートキッズで新しいことやレベルアップした項目に挑戦する時、子どもたちは口では「できんよー」「何それ、分からない」と言うことがありますが、目ではしっかりと次行うことや新しくすることを捉えており、表情も笑顔でワクワクした様子があります。いざ、新しいことに挑戦してみると、何度も何度も取り組む姿があり、なかなか思うようにいかず、気持ちが沈んでしまった時も、周りの楽しそうに挑戦する友だちを見たり、保育者やコーチの声かけを聞いたり一緒に挑戦することで、再度取り組む姿がありました。挑戦することの楽しさや、達成できたことの喜びを一緒に味わうことで、子どもたちの挑戦することへの意欲や新しいことへの期待感を育んでいくと思いました。

P71 すぐれたひと（中略）自然なひとです

私達、保育士がそうならないといけないと共感しました。

第3班 第3章

P77 「才能はあるものではない。才能はつくるものだ。」

P79 「へたな努力をすれば、へたな才能が…」

P87 「あさは、生長が速い。しかし…」

「才能はあるものではない。才能はつくるものだ。」「あさは、生長が速い。しかし…」は③に当てはまり、普段子どもたちと関わる中で様々な成長を見せてくれますが、苦手なことでもくり返し積み重ねていくことで、たくさんのことが出来るようになる子どもたちの姿と、この文は共感出来る部分がありました。また、毎日子どもたちと関わらせてもらっている中で、とても些細な成長を見逃しているのではと自分を思い返すことも出来ました。

「へたな努力をすれば、へたな才能が…」は④に当てはまると感じました。子どもたちは私たち保育者をよく見ていて、普段子どもたちに深く関わる私たちの振る舞いは子どもたちに大きく影響する為、普段から気をつけたいと思いました。

P77 「才能はあるものではない。才能はつくるものだ。」

P108 「人が 500 回出来ることを同じ程度にやるためには 5000 回やらねばならない」

子どもの時に良い先生や環境に巡り会えれば良いがそうでない場合もある。そうでない場合が多いのはなぜなのか。

鈴木先生は演奏を聞くだけでそのこの性格や人柄がわかるのはどうしてなのだろうか。

苦しい、しんどい練習をずっと続けても子どもは飽きるし嫌になる。そこで遊びを少し加えることで興味を持ち、楽しく練習に取り組むことができる。

例えば逆上がりや折り紙がなかなかできなかった子も何度も何度も練習を重ねることで少しずつできるようになること。

P78 「わたしは急がなかった。しかし、わたしは休まなかった。」

様々なエピソードから、この言葉の重要さが感じられたから。

P81～82 三十人の工員さんの喜び。手おそい工員が仕事の訓練強化ではなくピンポン玉の猛練習をすることでピンポンの腕も仕事の上達にもつながった話

2歳児を受け持っていて基本的な生活習慣を身に付けることを重点的に練習している（くり返し）特にトイレトレーニングでは全員が進んで楽しみながら練習している…ことができず毎年息詰まるポイントだった。トイレトレーニングばかりの練習ではなくピンポン玉の話ではないが遊びを取り入れ（歩いてトイレの中を探検しよう！オムツ・パンツを脱ぐ履く競争しよう！など…）楽しい遊びからいつの間にか上達へと繋がることの大事さ（そこにはくり返しくり返すことも含む）を感じている。

P81 「30人の行員さんの喜び」という文章

本当になるのかと思いました。ただ、鈴木先生が講演に行き手が遅いではなく頭が遅いという事に気づき、それを改善するためのアドバイスを瞬時に考えつくところ、そして実践して成果が出た事がホントなのだろうかと思う一方、私自身や園全体でも改善できる所を楽しく改善できるようになっらと思いました。

P81 「ゆっくり、ていねいに、くり返しくり返し三日間練習する。四日めにすこし速くして二日間。そして六日めに速くひいてみるのです。」

身の回りのことや活動面も、くり返し取り組んでいき、習得していく。初めから速くすると習得は難しい。特に初めは丁寧にゆっくりすることが後に繋がってくる。ゆっくり、ていねいに、くり返しくり返しに、とても共感した。

P81 30人の工員の話

P84 レッスンを始める前に必ずやるこの遊びに夢中になりキャッキャッと喜びました。

この本を読んで楽しくなければ続かないくり返せないと思ったことから、三章をもっと深めたいとかがえました。

30人の工員の話は30人もいて、ピンポンを全員が楽しく改善されたのか、と考えてしまいました。分科会で苦手意識がある人をいかに楽しいに導けるか保育士の腕しだいという話が出ました。そりゃそうだったと思うと同時に子どもだけではなく、大人も楽しいに引き込める様な人になりたいと心から思いました。

P85 子どもの短所を生まれつきとして放置せず、これを訓練して逆に長所とする

共感というよりこういう考えで子どもたちに関わって行きたいと思う。短所だからと諦めるのではなく長い時間をかけて変えていく、チャレンジしてみたいと思います

P86 「すぐに行動に移す」

「やってみよう」「やってみたい」の子どもの気持ちを大切にしながら、すぐに行動・実践できるように保育者が環境を整えてあげられるようにしたいと思った。

P86 繰り返し繰り返しという文章

今の自分があるのは日常生活でもなんでも繰り返し行ってきた出来ていると思いました。

P87 非凡な能力を育てる方法

生活や環境の中、small step でいつのまにか身につけている。その中には繰り返し正しい努力が必要で園生活の環境の中で子どもたちが継続して取り組むための工夫、ちょっとした変化、ちょっとした楽しみなど良い後押しができる並走者でいられる様にしたいと考えがまとまりました。

P88 おまへの右の手を見よ

右手は親の影響・保育者の影響で毎日繰り返し練習をしてすごい能力を得て発達していった。

左手も同じように練習をしていれば差がつくことなく発達できていただろう。

そんなことも考えずそれが当たり前として生きてきた。でもそれは当たり前ではなく繰り返し練習してきた成果だということに共感した。

P89 身につくーそれは、身につくまで努力し、くり返していくことによって達成できるー。

保育の中でも日々繰り返している俳句などは毎日の積み重ねによって子どもたちに身につけていっていると感じている。ただ、くり返すことの中で大切なのは、こちらが一方的にやらせるのではなく、子どもたちのやりたいのしいという気持ちを引き出していくことがくり返しを始めていく第一歩だと感じた。ヴァイオリンでも保育でも子どもたちのやってみたい、できるようになりたいという気持ちを引き出すことが保育者としての役割なのだと感じた。非才を嘆くは愚 全体的に当てはまる部分が多くあるので

P89 いかなる能力も、生まれつきで発揮されることはない。自分で育てる努力をするとき、能力はつくられていく。

いかなる能力とはどれくらいのものだろうと疑問に思いましたが、自分で育てる努力をするという点にとても共感しました。コツコツと繰り返し、積み重ねていく事で少しずつできるようになり、できたことをそれでやめては身につかない。出来たことを繰り返すことで、力が生まれ、感覚が育ち、能力が育ってくる。子どもをよい環境の中で育てていくためにも毎日の繰り返しを大切に根気強く子どもと関わっていきたいと思いました。

P89 できたことも、それでやめては身につかない。できたことをもう一度やってまたでき、またやってもっとでき、さらにやってもっとりっぱにできというように、できたことを繰り返す。という文章

園生活において、あるあるの話だと感じたためこの文章を選びました。リズム遊びや俳句なども一度覚えた部分でも何度も繰り返すことで子どもたちにも定着していくと感じました。子どもたちが取り組んでいるリボン結びにも当てはまらなと感じました。毎日取り組む中で段々とできるようになってくる子どもが増えてくる中で最初は、できたことへの喜びを感じていたが今では「上手にできた」という子どもたちの声を聞き、できたことを繰り返す大切さを改めて実感しました。

P92 「根気は達成への重大な能力」

「やり抜こう」と決心するが、本当にやり抜く人は少ない。決心したらまずは忍耐する。

⇒続ける必要な根気生まれる。

今までの行事練習で感じたところです。最初はできなくて、弱音をはく子もいます。きついこともあり

ますが、一生懸命取り組んでいると、できること(技の綺麗さ、勝つ経験、忍耐力)が増え、いいものにしていこうと頑張っていく姿が見られました。

P92 根気は達成への重大な能力

強く共感した箇所は、能力は自分でつくるものだ。それは、くり返しくり返しやることだ。

このしんぼうが運命を決めるという言葉に共感しました。

子どもも、保育士や大人も嫌だなやりたくないなと思う事が必ずしもあるはずですが、でも、根気強く向き合えば、必ず色々な成長・成果が見られると思います。その成長を見られた時振り返ったら、あの時根気強く向き合ってたなと必ず思うはずです。その為にも、子どもを信じる、自分自身を信じる事も大切だと思います。

P92 (4) 急ぐな、休むな、での「やり抜く一つまり、その根気もまた、能力であるがゆえに、育てなければならないものです。」という文章

園での子どもたちの俳句が口をついて出てきている様子や、バイオリンのお稽古でもきちんとした音を出せていたりするのを耳にすると、継続は本当に身につくものだなと感心させられます。くり返しやることの大切さ、根気よく楽しみながら続けていくことの大事さを感じました。

でも、このやり抜くことがとても難しいことは身にしみて感じています。根気よくやり抜く力も本当に能力なんだとあらためて思いました。

P93 「一粒の種子を土に埋めます。しかし、なかなか芽を出しません。ところが、目にこそ見えなくても、土に埋めたそのときから、種子は発芽に向かって変化し始めているのです。・・・あせって掘り返してはいけない。」という文章

子供一人一人事柄に対しての反応がいろいろで、すぐに反応があり受け入れて成長が見られる子もいるが、なかなか反応がなく「伝わっているのかな?」「理解しているのかな?」と思う子もいる。あせって過剰に援助してしまうことがあったのではと反省させられました。その子の中で、その子のペースで動き出していたのかもしれないのに、過剰な援助で自信を失わせていたかも?達成感を奪っていたのかも?しれないと思い考えさせられました。これからは、子供たちの力を信じて関わっていけたらと思います。

P94 「根の気力ー根気」だんだん伸び育ち、がっしりしてくる木の姿ーそれに比例して、根もまただんだん太く大きく張ってきます。この根気は、やり抜くひとの宝物だといえます。

植物を育てる時、綺麗で大きな実が成ったり、鮮やかな花を咲かせたりと、得られた結果のみに着目して、土の中は重要視してなかった。成果を得るには、その過程が重要。諦めず継続し取り組み続けること、またその続けることを諦めない根気強さこそが、成果に結び付くことを改めて、そうだな!と思い共感しました。水を与え続けなければ、花や実は成らない。

P94 「急ぐべからず、休むべからず」

日々の園生活の繰り返しが、子どもたちの習慣になり身に付いていくことと結びついていると思いました。例えば俳句の暗唱、履物を揃えること、身の回りの自立など、保育者が毎日繰り返すことで、1日

では身につかなくても、着実に子どもたちには伝わっていると感じます。

子育てをしている中でも、同様に感じます。子供に嫌がられても口酸っぱく言う事で、躰になると信じて実践しています。

P96 「そうだ。まずわたしが盲人の状態になって考えるべきだ。」からの田中禎一さんとのエピソード

自分の視点（当たり前）から捉えるのではなく、相手の視点（立場）にたって、考える大切さを改めて感じた。その子の状況にたち、その子その子に合わせた環境や取り組み方、声のかけ方、言葉選びなどを考えていくという、保育に携わる上で大切なことで常に心に留めておきたいことだと感じた。

P108 500 回やっても～の部分

園の生活の中でも 1 回でひょいっと出来てしまう子もいる中、1 ヶ月半年と時間をかけてやっとできるようになる子もいる。そんな中で一番重要なのは見守り寄り添ってくれる大人だと思います、その時にあなたには才能がないからといってしてしまうとその子のやる気も能力も奪ってしまう。ですが、見守ってくれる大人の存在があることで例えその子が在園中に出来なくてもいつか開花してやり遂げるという達成感を知ることが出来る。

この仕事は成し遂げ開花する瞬間に立ち会うことが出来ない時もあるが、信じて今できる関わりをしていくことの大切さを知ることが出来ました

集団での活動が難しい、発達面でしんどい。という子供に、この子はできないからさせない！ではなくてどのような工夫をしたらこの子にとってより良い関わりなのか、どのようにしたらみんなと違う形ではあってもできるだけみんなと近い形で参加させてあげられるだろうかなど常に試行錯誤しながら、保育を進めることが

子供にとって大切な環境なのかなと思いました。正直、自分に余裕が無い時はそういった対応が出来ないこともあります。なのでまずは自分余裕を持つことが大切だと思います

人間の能力を決めつけてしまうのではなく、才能は作るものである

この子はこれが苦手と決めてしまうことは、その子の成長や才能の芽を摘んでしまうこと。毎日のヴァイオリンのお稽古や、その他の活動(運動など)においても、1 回で出来る子もいれば 100 回で出来る子もいる。すぐに出来なかったから悪いのではなく、その子に合った指導法や声掛けをする事で 1 歩前進したり、やる気スイッチが入ったりして、成功に繋がることもある。日々の保育の中のあらゆる場面に、スズキ・メソードの教訓が土台となり、根付いていると感じる。

第 4 班 第 4 章

P116 後ろから 4 行目 ものを追求し研究する熱意と努力の姿を、わたしは小さいときから毎日の生活のなかで見せられ、そして教えられてきたわけです。

園庭に出ると、必ずと言っていいほど、誰かしらが生き物を見つけて、みんなに知らせてくれます。みんなで見つけた喜びを共有したい、観察したい、という思いから、大事そうに捕まえて眺める姿や、自然に帰すときに名残惜しそうにする姿は、鈴木先生の気持ちと同じなのではないかなと感じました。

子どもたちは周りの大人の言動をよく見ています。保育者の私たちも、言葉だけでなく、行動で示すこ

とで、子どもたちに伝えられる何かがあると感じました。また、そのような姿を見てきた鈴木先生だからこそ、繰り返しの大切さを実感することが出来たのだらうと感じたので、諦めずに取り組む姿勢を見習いたいと思いました。

**P117 ものごとへのたゆみない研究心ということのほかに、ひとは誠実でなければなら
ない、ということの実行による教訓です。**

P120 お金はあげても貸してはならない

P121 「使わせてもらう」「つねに学ぶ心がけ」

P122 うれしいと思うような心をもつべきだ

日々の中で意識したい言葉だと感じた。良かれと思ってやったことが、相手にとっては違うことがある。または、伝わってない。行動だけでなく言葉を尽くすことが必要だと感じた。見返り(反応)を求めてしまう気持ちがあったことに気づき、自分の心もちによって考え方や捉え方を見直すきっかけになった。

P118 ひたむきに一步一步仕事をしていく

利益、効果が上がらなくても一步一步繰り返し続けていくことに共感をもちました。

**P118 「すぐやめたりしないで、気ながに、ひたむきに一步一步仕事をしていく。そうす
れば、なんでもたいていのことはできる。」という文章**

身体の使い方が不器用な子が短縄・前跳びの習得に苦戦していたことがあった。でもその子は真面目で毎日必ず戸外で時間いっぱい縄を跳び続けていた。すると、半年間かかったが、年長児に上がる直前に前跳びが出来るようになった。その場面を見て、コツを掴むのが時間のかかる子どもだけど、継続して続けていれば必ず出来るようになるのだなと思い、その子どもの根気強さと努力する姿に感動した。

**P122 なにかの縁でそうなったのであるから、いっしょに乗り合わせたことをうれしいと
思うような心を持つべきだ**

家族はもちろん、職場も友人も、何かの縁があって集まっている仲間だと思うからです。本には「一緒に乗り合わせた人」に対しても書いていますが、偶然から起こる縁をこれからも大切にしたいと思えます。また、挨拶は基本だと思うので自分の子どもにはもちろんですが、園の子どもたちにも挨拶の大切さに触れ、自然と自ら挨拶ができるような子どもになって欲しいので出来るようになるまで繰り返し声かけ・促しをしてきたいと思いました。

P122 向かい合わせになったひと～うれしいと思うような心を持つべきだ

子育て支援においても、毎回必ず園長先生をはじめ、職員の私たちも、参加保護者の方々への挨拶時に伝えていることだから。

例：「今回この場にお集まりいただき、ここにいる仲間と出会えたことも、きっと何かのご縁だと思いますので…」と伝えている。

その他、

- ・一度ベビマ教室でお会いしたことがある方が幼稚園の保護者としてまた再開することになった
- ・園児の祖母が私の小学1年のころ憧れていた担任の先生で、何十年ぶりに偶然にも再会できた
- ・卒園したあとも、子育て支援で出会った保護者同士がつながっていて交流が続いているなど、一度き

りの出会いではないことを感じた事例がいくつもあるから。

保護者の方の中には、この方はタイプの的に苦手だと感じる方もいるが、これもまた何かのご縁で、スキルアップのための試練なのかもしれない、ありがたいことだと思いながら接していこうと改めて思えた部分だった。

P125 それはあちらがわのつごうで～せいいっぱい生きるだけだ

自分の都合の良いことばかりを願わずに、日々感謝して人生を精一杯生きていこうと思いました。

P128 ただ子どもが好きだったのです

日々の保育や業務に追われてしまうことが多いですが、そういえば子どもが好きで、幼稚園教諭になったんだ！と初心に帰る時がありました。そういうときは、必ず子どもたちに笑顔にしてもらったときや子どもたちと何か楽しいことや達成感を味わったとき(行事など)で、私も子どもたちからたくさん学んでいるんだなと気付かされます！夏休みが終わっても子どもたちと楽しく過ごしたいです！

P128～129 「私はただ子どもが好きだったのです。」から「子どもたちに学ぶ心で遊ぶようになりました。子どもたちのこの素直な人間の姿をいつも自分にもっていたいと思いました。」まで

過ごしていると、日々の保育や業務に追われて忘れてしまう気持ちだなと思いました。ふとした時に「そうだ！私は子どもが好きで幼稚園教諭になったんだ！」と思うことがあります。そういう時はいつも子どもたちに笑わせてもらったときや一緒に何かやり遂げたり、楽しい思い出を作ったときだなと振り返って思います。子どもが何にも染まっていない尊い存在であること、これから大人の接し方や環境に応じて如何様にも変わっていくことを忘れてはならないなと感じました。夏休みが終わって子どもたちとクラスで過ごすことが今日 1 日の研修を終えてさらに楽しみになりました！鈴木先生の思いを忘れず、これからの子どもたちとの日々に生かしていきたいです。

P129 子供たちに学ぶ心で遊ぶようになりました

子供たちと関わる中で大事な考えだと思いました。

P129 子どもたちのこの素直な人間の姿をいつも自分に持っていきたいとおもいました

教育者として、子どもたちの率直な関わりができる人材として、環境を通して学び心を大切にしていきたいと思いました。

P134 踏めば、あの小さなものの生命が永遠に失われるのだと思うと、無心に歩けなかったのです。

P144 「徳川先生の大きな愛情でした。わたしは、素直になろう、幼児の心になろうと、毎日つとめていました。」という文章

私も常に、素直でいたい、大きな愛情を持ちつづけたいと感じました。

第5班 第5章・第6章

P157 「音楽に対してりっぱな能力を身につけたひとは、他の分野に行けば、その分野の高い能力を示すのです。」

音楽以外にも高い能力が作られるのだろうか？と疑問に思った。元中学の体育教師をしていた先生が、様々なスポーツを教えるにあたり、音楽ができる子は、リズムよくボールを投げたりとったりすることができる子が多かった。また、打楽器を任せられる子はスポーツの才能がある子が多くいたという意見を聞き、リズム感は、音楽だけでなくスポーツにも関わってくるものなんだと気づいた。また、楽器は両手や足を使い、一度にすることがたくさんあることで、集中力が身につき、勉強などでも集中して進めることができると感じた。

P166 「芸術作品は、全人格・全感覚・全能力の表現である」という文章。芸術が単なる技術や作品ではなく、その人自身の生き方や感性の表現であるという考え方

「音にいのち在り姿なく生きて」169 前から4行目について考えたいです。これは、音楽が単なる音の集合ではなく、目に見えない生命のような存在として生きているという意味。音楽を通じて人間の生命や感情が表現され、私たちの内面に生き続けるという深い哲学的な考えを示していると私は考えました。

「テストは順位をつけるためのものではない」172 後ろから4行目について、本来のテストの目的は理解度の把握であり、子どもの評価を数字で決めることではないという指摘は教育現場の現実と理想のギャップを示している。理想的な見解だが、実際の運用には課題が多いと私は考えました。

「反省のしっばなしは反省の放棄に繋がる」180 前から7行目について、反省だけで終わり行動に移さなければ意味がないという指摘は心理学的にも妥当で、自己改善には具体的な行動変容が必要とされると私は考えます。

「思うだけでは能力ではない。やってのけてこそ能力なのだ」176 後ろから2行目→行動の重要性を端的に表現しており、知識や思考だけではなく実践が真の力になるという点に共感しました。

「やればできるという言葉は単なる言葉と捉えてはいけない」183 後ろから2行目→努力と継続の力を信じる姿勢は、多くの人に勇気と希望を与えるとこに共感しました。

子どもに「教える」だけでなく「育てる」教育の重要性について、幼児期の教育において単に知識を与えるのではなく、子どもの興味や生命力を引き出す活動が求められる。遊びや体験を通して育つ力を重視する場面。

「思ったらすぐ実行する」習慣づけについて、小さな約束やルールを守ることを促し、子どもが自分で考えたことをすぐに行動に移せるよう支援する日常の保育活動を行う。反省と自己矯正のサポートについて、子どもが失敗や間違いに気づいたとき、ただ叱るのではなく、どうすればよいか新しい方法を一緒に考え、実践させることで成長を促す。能力の多様性を尊重するについて、友だちと仲良くする力や表現力、感受性など、多様な能力を認め、育てる保育方針。

P168 「音にいのち在り姿なくて生きて」

親友が亡くなり、それでもその人が発した言葉（音）を常に忘れないし、忘れられない。ずっと今でも心の中にあります。姿はなくても心の中にいきているんだと。

P170 「ことばや文字を越えた生命のことば」

生命のことばとは、どんなものがあるのだろうか？と疑問に思った。耳で音を聞いた時にいろいろな感情を与える感動などのことを言うのではないかという意見を聞き、言葉や文字だけが私たちの伝える言葉ではなく、音も生命であるからこそ音としていろいろな感情を投げかけてくることばなのかなと感じた。

P170 人類は、ことばと文字という文化を創造すると同時に音楽というすばらしい文化をつくりました。それは、ことばや文字を超えた生命のことば、神秘ともいうべき生きた芸術です。無上の喜びと感動を与えてくれている。

ことばや文字を超えた生命のことばとはどんなものがあるのか。意味合いを考え、教えてもらいたい。

P172 「教えるのではなく育てることだ」という文章

日々の保育で教えてあげたいの気持ちで活動してしまっていたが、子どもの育つを大切にしながら日々の保育に努めたい

P172 教えることだけに夢中になって、育つという子どもの生命の実体を忘れている

毎日時間に追われる中で教えることに集中し過ぎてしまい、一番大切な子どもの育ちの部分がおろそかになっていたと改めて気づいた。子どもの育ちを大切にできる保育を心がけていきたい。

P173 「一つでもいいから、それぞれの子に、しっかりとした能力を身につけてほしい。」
親として我が子に全て出来なくても自分にはこれが一番できると自信をもてるものが一つでもあるといいなと感じた。

P173 「義務教育の九年間に、1 つでもいいから、それぞれの子に、しっかりとした能力を身につけてやってほしい」という文章

園だけで1つの能力を身につけるのは難しいこと。義務教育は九年間だが、園生活の六年間はその子の能力を1つでも身につけられるように家庭と連携していけるようにしていきたい

P173 「義務教育の九年間に、一つだけでもいいから、それぞれの子にしっかりとした能力を身につけさせてやってほしい」という文章

人間性を高めていくことが大切だと思うので、その通りだと感じたから。なにか一つでも自信がもてることがあると社会に出た時に強みになり、何事にも頑張れると思う。そして、能力を身につけた過程の努力が他のことにも繋がり、また一つ能力が身につけていくと考える。

P173 一つでもいいから、それぞれの子に、しっかりとした能力を身につけてほしい

得意、不得意は人それぞれあると思うのでその子にあった得意なことを一つ見つけていき、その子にあった学びにつなげることで、自分に自信がもてると思った。事例として、ダンスが苦手だった子に無理矢理ダンスをするのではなく、絵を描いたり物を作ったりする所が得意だったので、得意な所をたくさん褒めていくことで、自信がつき苦手なことにもチャレンジしてみようとするきっかけになった事もあ

ったので、よりこの一文がとても印象に残った。

P175 「子どもたちの成績表は、教師の成績表」

子どもの成績表で理解度を数字にして明確にしている。でも、数字で記載していることは、目に見えて分かること、どれだけ子どもたちが理解できていることを知ることだと感じた。

自分が教師の立場で振り返ることで、自分の能力、伝え方などを示していることになるのではと思った。日頃から、家庭や仕事のなかで、自分がどれだけのことをして、子どものためになっていることはあるのかなど、振り返ることで、自分に返ってくるものだと感じた。

活動や子どもとの関わりの中で、自分が個々に応じて対応していることは、その子にどれだけ思いが伝わっているのかと様子を観察すると、目に見えて分かること、目に見えて分からない脳内ネットワークへの働きかけなど、良い刺激を与えていることは、出来なかったことができるようになった喜びやきっかけ作りへとつながっていると思った。

P176 「思うだけでは能力ではない。それは、思わないのと結果は同じだ。やってのけてこそ、能力なのだ。思ったら行なう能力を身につけよう。」という文章

私は普段、頭の中で「こうした方が良いのではないかな」と思いながらもなかなか行動に移せず、最終的に「やはりあの時行えば良かった」と思うことが多いです。それを反省し、最近では思った時に行動に移すことを心掛けるようにしています。思った時に行動する事はいい事しかなく、自身の能力となり、心もいい気分、自信に繋がると感じ、この箇所に共感することが出来ました。

P176 必要なのは実行に移す能力

やりたいなと思うことはあるけど、実行に移すことは難しいが少しずつ実行できるようにする。急がず焦らず諦めず。

P176 「思うだけでは能力ではない、思わないのと同じだ」という文章

「必要なのは実行に移す能力」というタイトルの通り、日々の保育において今後もより良い保育を目指していく為の反省も実行しなければ意味がなくただ思うだけでは何も変わらないと思うから。

P176 「必要なのは実行に移す能力」

もっとこうすれば良かった、こうしてみよう！と思っても行動に移さなければ思わないのと同じ。日々の保育での反省を次に活かす為には行動に移す事が大切だと思ったから。

P176 「必要なのは実行に移す能力」

いろいろな理由をつけて諦めることが多く、後悔することが日々の中でたくさんあった。失敗してもいいからまず行動する能力を自分自身につけていきたいと思った。自分が身につけて実践することで、子ども達の見本となり、子どもの実行に移す能力を育むきっかけになると思った。

P177 思うだけではチャンスも逃げるという文章

自分自身も日々、思いついたら行動するようにしてそれは後悔をしたくないから後悔をしないよう

に行動しています。でも思うだけで行動まで移せないそんなときもあります。自らチャンスを放棄していると書いてありその通りだなと思いました。それを保育にした時、子どもがよく、やりたいだとかやってみたいと言うことが多くあります。その子どもの気持ちを大切にやらせてあげられるように保育者が環境を整えたり支えてあげることが大切だととても思うことができました。なので上記の文章がとても印象的でした。

P177 「思うだけではチャンスも逃げる」という節

この節の内容に共感というか、とても納得と新しい発見を感じました。昔母から「チャンスの神様は前髪しかないから、出会ったらすぐに前髪をつかみなさい」と少し乱暴な表現ですが、同じようなことを言われていました。そのような行動や考え方がとても役に立っていると振り返って思っていました。この節を読んで、このような行動や考え方をどう育てるのかという事がよくわかり、納得の内容でした

P178 「すべては実行するかしないかに」実行する能力を身に付ける-これは、あらゆる人にとって、この人生の、1番大事なこと人生の成功も失敗も実にこの一つにかかっている。という文章

言葉にすること、思う事は、簡単ですが、子育てにおいても、保育においても、これは自分に言われているような気持ちになりました。

P178 「実行する能力を身につける、実行する習慣を身につける」

保育でもしたいことを思いつくことはよくあるけれど、それを全て言葉にして伝えたり、行動したりすることはしていないなと感じ、実行しなければ意味が無いのだなと思いました。

P179 「知識はただ知識であって、能力ではない」

知識があってもその知識を活かして行動実行しなければ何も意味ない！正にそうだと思った。

P181 矯正は不可能。なのか本当なのだろうか。

矯正できないのであれば、どうすればよいのか。新しい能力を生み出すこと、身につける以外にできないのか。

P183 繰り返し繰り返すことによって何事も身につくという文章

急がず休まず諦めずという言葉の様に、諦めてしまったらそこで終わりだが、諦めずに繰り返す事で身につく事もあるもいう所に強く共感しました

P183 「くり返しくり返すことによってなにごとも身につく能力となる。」

4月 は出来なかった座る、待つなど日々のくり返しによって段々出来るようになった。また、エリートキッズや英語など、初めてした事もくり返し行っていくことで、動作が出来るようになったり英語の単語や歌が言えるようになったり育ちに繋がっていくと感じた。

P183 くり返しくり返すことによってなにごとにも身につく、能力となる。この鉄則をここでも生かし、どんな小さなことでも、気づいたことはすぐに実行に移す。自分をむち打ちむち打ち、へこたれないでやり抜く。——これが身につく習慣になれば、わたしたちは、不可能と考えられたことも可能になり、閉ざされた道もひらけてくることを、わたしはいろいろなばあいに発見します

言葉にするのは簡単だが、行動することの大切さ。何度も出てくる、くり返しくり返しの言葉。

日々の積み重ね、毎日の教育・保育の中で子どもたちが身につけていく場面。中でも朝の身支度や朝の会での出来事。身支度の準備が保育者の援助なくても自分たちで手を動かして取り組んでいる。

また5月頃には口の体操【あいうべ体操】では、前の保育者の口の形を真似て行っていた子どもの姿があったが、6月頃から子どもたち自身で口を動かし、発声出来るようになってきた。また季節の歌では月初めから歌う新しい歌でも半月頃になると、歌詞のフレーズなど覚え、月の終わり頃には身振りも付けて歌うことが出来るようになるなど、毎日の中でくり返し、くり返すことで、習慣の中で、出来るようになることの場面に出くわすことがあった。

第6班 第7章・第8章・あとがき

P191 第七章の遊び心を活かす（子どもよりもまず親を指導）の中で、親が一曲弾けるまで子どもにヴァイオリンを弾かせないという文

この文を読んでどういう狙いがあるのかなと疑問に思いながら読み進めたんですが、やらせたいと思っても子どもはやりたがらない、なら親がしている姿を見て子どもが「ヴァイオリンを弾きたい遊びたい」という心が育つという文を読んで、の活動の導入で子どもたちが遊びたい！したいという気持ち、主体性を大切にしているので共感できました。

P192 必要なことは、子どもが無意識のうちに「自分をやりたい」という気持ちをもつようにすることです

園生活において子どもと何かの活動をする際や目標に向かって取り組みを行う際に、この気持ちが必要で、この気持ちに持っていけるように援助したり促すことが大切だと思ったから

P193 遊びで始め、遊ぶ楽しさで導く

日常の保育の中で、朝のおやつ後の着席を誘導する時に、手遊びと歌を取り入れた事で、遊び感覚で子どもたちが着席できるようになった経験とリンクしたため。

P194 遊ぶ楽しさで始めさせ、遊ぶ楽しさで正しいほうへ導く幼児の教育は、なにごとに
よらず、ここからなされねばなりません。

自分の子育てと照らし合わせた時に、親も楽しみながら子どもの遊び心をくすぐるやり方でやっていたのかと反省。わが子が中学生になった今からでも間に合うのか。今からでも一緒に楽しみながらやっていたかと思いました。

P194 遊ぶ楽しさで始めさせ、遊ぶ楽しさで正しい方へ導く

何かを習得する為に厳しさや我慢などがまず先にイメージしてしまいましたが、子供が楽しみながら積み上げていく事に感銘を受けました。そして、子供達を楽しみながら取り組めるように周りの大人が日々工夫をしていく事が大切だと感じました。

P195～199 (全体)

繰り返し行うことが大切だが、親や保育者が楽しむ姿を見せることの大切さも感じました。自分自身が実践しようと心がけていることなので、共感できました。

P198 わたしはどの子をもりっぱにすることに決めている

どの子も立派になるといいなという思いで保育はしていた。年間のカリキュラムを踏まえて、ある程度習得できるように、進級したときに困らないようになど、子どもの特性や性格、家庭環境など、自分の保育年数を重ねるほど、その子にあった保育、その子が少し頑張ればできる保育をと考えていた。この一文で、自分が言い訳をしているようで、どこか他人事だったのかと感じて恥ずかしかった。その子を主体的に考えることはもちろん大切で今後も気をつけるポイントとしておさえておきたいが、そこに自分の思いや意識、責任感をもって保育に励んでいきたいと思った。強く共感したというよりは、衝撃を受け、今自分に足りないものと感じたので、その気持ちを大切にしたいと思った。

P198 能力が身についたかテストする遊びの内容や様子が読んでいて印象的でした

自分の過去の保育を振り返ったときに、果たして子どもたちは「やりたい！」と思っていたのか、自分自身、「子どもたちをこのレベルまでもっていかない」「こうやってしないと」となっていたのではと考えさせられました。鈴木先生のレッスンは遊びのように楽しく、テスト遊び(チャレンジすること)においても子どもたちがワクワクしながら取り組んでいる様子が見受けられました。よって、「やりたい！」と自発的になれる環境づくりの大切さを改めて考え直すことができました。また、間違えたとき、上手くいかなかったときに矯正するのではなく、出来る経験を繰り返すことによって自然と力が身につく、喜びや実感を重ね自信へと繋がることをできると思いました。「教育」ではなく、「遊び」にて育てていくことが大切で、学びと遊びの境界をなくし、楽しさの中から発見や習得ができるように保育を展開していきたいです。

P200～202 (全体)

どの分野においてもすぐれた能力を発揮するように育つという所に惹かれました

P200 子ども達が面白がってやるテスト遊び

P201 まるで楽しいゲームをやっているよう

子供達の目線になって考えてみると、ゲーム感覚でやる事で上達の仕方も早いのかなと思ったり、201ページの絵を見てわかるように、子ども達も外で楽しそうにバイオリンをやっている姿を見て、まずは子ども達が楽しくやる事が大切だと共感しました。

P215 大人達が、この子供達のような幼い時期から高い心と高貴な行いで、人生の第一歩

を踏み出せるのはなんと素晴らしい事であるか。しかもその方法は音楽なのです。音楽で訓練し、音楽を理解させる

自分の子育てして来た環境とは全く違う環境の事が書いてあり、理解に悩みました。親が家事、仕事、お金、時間に追われて子育てに精一杯な時に、まず、親がバイオリンを習おうなどと思わず、また経済的にバイオリンを習わせようとは思いませんでした。バイオリンニストになりたいと、ならせたいと思っていたら変わっていたかもしれませんが。親の育て来た環境を私は当たり前と思ってそのまま、親の良い育て方を真似して育てて来たつもりです。音楽の中で育った事ありません。本を読んで、自分の子供は良い子に育ってないのか?と疑問に思い子供達にこんな親でごめんね。と言う思いに涙が浮かびました。親を見て育つので、精一杯頑張って子育てして来ましたが、間違っていたなんて。まだ間に合うと言われても、子育てを否定されたようで悲しい気持ちになりました。共感出来る所もありました。また、こんな子育て方があったことも知ることができました。ありがとうございました。

P224 三つ子の魂百まで

あとがきではなくて現場の具体的なご意見を述べられています。その中でも「三つ子の魂百まで」を否定的な言葉として使うのではなく、私たちが自分の仕事としての「幼児教育がこれからの人格形成にいかにか大事か」と言う意味で考えると私たちの責任はとても重いと感じました。同時に、仕事を誇りに思う。

P224 わたしの努力はそこなわれた自分をみずから修繕し、自分をなおすことに、若い日からなされ続けてきました。そうして今日ここにいます。(中略)わたしたちはみんな、生まれつきだとあきらめることなく、それぞれに努力すれば、望ましいひとになりうるし、能力を獲得できる

うまく行かなかったとき、すぐに気づき、修繕すれば、誰でも能力を発揮できると、思ったから。60代の私でも、今からでも遅くないと感ずることとができたので。

その他

P4 「いったん育てられたわたしたちは、死ぬ日まで、自分で生きなければならない。するとそこに、いかに生きるかという、のっぴきならない問題が出てきます。育てられなかった能力は自分でつくらなければならない。(中略)そしてそれは、ひとそれぞれに可能なのです。」

P56 「『耕ちゃんは、三年のあいだに、自分でも知らないで、不作法や、やりっぱなしを身につけてしまった。しかし、ここでしかってはいけない。(中略)家じゅうが黙って、もっと良い作法、よい行動の生活をするようにしようではないか。(中略)耕ちゃんのためにーしかし、このことは、耕児君のためよりも、むしろ、家のもの全体の、お互いの心と行為とのよいけいこになりました。』

P166 「芸術の実体は、そんな高いところ、遠いところにあるものではなかった。それはもっとも日常的なわたし自身にあったのです。わたし自身の感覚の成長と心のあり方と働きと日常の起居ーそれがわたしの芸術そのものであり、そうでなければならなかったのです。(後略)」

P224 「わたしもまたそこなわれた人間のひとりです。多くの人がそうでした。わたしの

努力は、そこなわれた自分をみずから修繕し、自分をなおすことに、若い日からなされ続けてきました。」

音楽に関わらず、全ての育った結果が＜能力＞であること。そして、本書では「まえがき」から各章、そして「あとがき」まで鈴木先生の「実践」を背景に、より良く、より高い＜能力＞の発露を促す環境形成、社会形成のため、（子どもや親でなく）我々自身が変わることを強く説かれている点、自己を省みさせられます。

道のりは果てしなく遠く、哑然茫然の感ですが、自身へのリスペクトをも失くさず少しずつの変化を楽しんでいきたいと改めて意を新たにしました次第です。

P171 才能教育は生命への教育

東先生のお話の中にもありましたように全ては生命の働きによって自然界に集積され繋がっていることが生命への教育 「愛に生きる」全てにおいて心に留めたいお話です。

P33 ものになる？いや、なりませんよ

大人はお金(将来食べていけるか?)にこだわる

P224 小見出し 「あすといわずに今日ただいまから」の言葉

自分に1番足りないところだからです。思ったらすぐ実行する人間になろうと思うからです。

『惹かれた』という意味合いは違いますが、読後に『何て読みやすい本なんだろう』と思いました。東先生や小林さんのお話をお聞きして、そう感じたことはもっともだったのだと思いました。加えて、鈴木鎮一先生の文章や言葉の一つひとつがスッと体に入ってくるように感じます。音楽に通じるものがあると思います。質問本来の『惹かれた』ところは選ぶのが非常に難しいです。1冊丸ごと学びがあるからです。

能力は育てるものだ「能力は生まれつきではない」

私は「能力は育てるものだ、能力は生まれつきではない」という言葉に強く惹かれました。

この一文は、私の中にあった「できる人は最初から特別な才能を持っている」という思い込みを大きく揺さぶりました。保育の仕事始めてから、自分の力不足や経験の浅さに不安を感じることもありましたが、この言葉は「今の自分に足りないものは、これから育てていけばいい」という希望を与えてくれます。また、子どもたちの成長にも通じる考え方だと感じます。生まれつきの差ではなく、日々の環境や経験の積み重ねによって力は育つという視点は、保育者としての関わり方を改めて考えるきっかけになります。失敗や時間のかかることも、決して無駄ではなく、努力の過程こそが未来の力をつくっていくのだという前向きなメッセージが、この言葉には込められていると感じました。”

人間は、育てられたようにしか育たない

やるべきだと思いながら行動に移さないことこそ最大の短所

教育の重みと責任を改めて感じさせるものでした。教師や親だけでなく、社会全体で子どもを育てていくことの大切さを実感しました。また、「やるべきだと思いながら行動に移さないことこそ最大の短所」という言葉も強く心に残りました。これは子どもだけでなく、私自身にも深く刺さる言葉でした。「すぐやる」という小さな一歩が、人生の大きな分かれ道になるという指摘は、シンプルながらとても重い

真理だなと感じました。才能は特別な人のものではなく、「育てることができる」ものだという信念と、そのために日々の積み重ねを大切にする姿勢に、これからも子どもたちのために日々精進しようとおもいました。

『愛に生きる』の中で、鈴木鎮一さんは「才能は生まれつきではない。育てるものである」と繰り返し述べている。この言葉を読んだとき、日々の保育で子どもをどう見ているかを振り返る大切さを改めて感じました。

保育の現場では、発達の早い子、ゆっくりな子それぞれがいて、その中で「この子はこうだから」と決めつけず、可能性を信じられる視点を持てる言葉だからとても惹かれました。この言葉を読んでどの子にも可能性はあるんだなと思いました。

第三章「失敗を責めない」というところに共感しました。

失敗を責めてしまうと、失敗してはいけないと思ってしまうと考えました。

失敗を恐れて、初めからやらない子どもがいた経験があります。なので真実だと思います。

子どもは失敗を重ねて成長する。

失敗を恐れて、初めからやらない子どもがいたことがあり、失敗してもいいからやってみよう！できる！と声かけをするようにし始めました。